
真剣で最終に恋してみろ！

カイギネス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で最終に恋してみろ！

【Nコード】

N3607T

【作者名】

カイギネス

【あらすじ】

何故か小説を読もうに投稿してしまったみたいなので（言われるまで気が付かなかった……）。

手始めに、

突然だが、俺には前世の記憶がある。

因みに前世では大手企業の営業マンだった。

頭が可笑しいんじゃないかと思われるのも癪だったから他の誰にも言っていないけど、少なくとも俺が今いるところは前世の記憶とイマイチ……というよりかなりズレてる節がある。

例えば町の名前、俺の現在住んでいる川神市 そのような市は無かったはずだ、それに武術だなんだってのはそれ程メジャーでなかったはずだ、少なくとも安易に他人に向けていいものじゃなかった、つか向けた時点で通報ものだし。

それがここじゃ普通に街中で喧嘩、俺から見たら殺し合いレベルを繰り広げているし、俺の今通っている川神高校なんて決闘とかいう制度まである、正直言って想定範囲を遥かに逸脱した事態だった。

しかも髪の色がどこぞのアニメだ！と突っ込みたくなるような色の者までいる、てかこの学園には身嗜み検査とかはないのか？つか茶髪とかならまだしも金髪とか白とか銀とか・・・地毛か？それ地毛なのか！？と問い詰めたくなるような色の奴らまでいる。まあ俺も人のこと言えないんだが・・・。

あと一番の疑問なんだが 女子のあのスタイルの良さ、そしてあの異様なまでの戦闘能力の高さはなんだ？

謎だ。そして何故比較的に男子の方が運動能力が低いんだ？別に男女差別してるわけじゃないが色々無理があるだろう！

まあそんな学園に通っている しかも前世の記憶がある俺が可笑しくない筈がないんだが、それは後々語るとしよう。

兎に角俺は基本スタイルは一般ピーポーを貫いているから絡まれることはないが、一番警戒すべきはその女子の中でも好戦的否、獣的な奴等だ。

あれは駄目だ、俺の本能が警告してる。あれと関わると絶対に後悔すると、兎に角なんにしても俺とどうやっても分かり合えないような人種がこの世界にはわんさかいるわけだ。

その中でも風間ファミリーと呼ばれる集団の最年長、川神百代はヤヴァイ。なんたって最強だなんだと呼ばれてるんだからな、目をつけられたらそれこそ他の者達にも芋蔓式に目をつけられかねない。

まあ絡まれたところで万が一にも負けることはないだろう。だが俺は絡まれたり戦わされるのが嫌いなだけだ、あんな綺麗な人達に絡まれて嬉しくない筈はないんだがそれでも戦いだなんだなんてのは遠慮願いたい。

兎に角言えることは俺は転生者という部類の人間で、転生先の世界は生活水準や技術力等は同レベルなものの何故か武道を習うもはやコイツ人間？と言いたくなるような奴等（主に女）がいるし、街中で戦っても許容される変な世界で、そして俺はこの世界でも以上に異端な存在として生まれ落ちてしまったということだ。

登校風景それは、悪夢

さて、君達は朝というものに対して何を思い浮かべるだろう。

一日の活力源となる朝食？朝日？「学生ならまた学校か」とかだろうか、俺は

「悪夢」

である。

朝、登校中の俺の視界内に入るのはある女性に突っ込んでいった不良共がその数秒後、空へフツ飛ぶという漫画のような光景だ。

前世の世界でこんなことやろうものなら傷害罪及び器物破損、下手すれば いやしくなくても殺人未遂か。あとはニュース等で『生身で大の男を拳で吹き飛ばす化け物女登場！』だろうか。

まあ高校までの違う町に暮らしていた時にも女子でコイツ人？みたいな人間はいたさ、喧嘩上等で喧嘩常勝の女がいてその女が纏めるヤバげなレディースがいたもんだ。

しかしたった一人で大の男（十人以上）を拳で怪我一つ負わず上空に吹き飛ばし積み上げる女はいなかった、つかいてほしくねえよ。

設備とか学力平均値などだけで判断しこの高校を志望、試験に受かって意気揚々と登校してみればこれだ。といってももうここにきて一年も経った今ではそれも見てもなんとも思わなくなわな。 ならね

とか言ってる俺も十分、というかこの世界でも最上位に食い込む異常な人間の一人だ
俺には前世の記憶がある、そして何の因果か特異な体で生まれた。

橙色の髪、人間が出来る範囲のことなら知識さえあればちよつとの努力でほぼ全ての事が可能、単純な筋力のみで鉄をへし曲げ岩を粉々にすることが可能な肉体。

ここまで言えば分かる人もいるかもしれない
戯言

シリーズという小説の登場人物にして単純なスペックでは他の追隨を許さない、『人類最終』にして『橙なる種』想影真心である。

奇しくも俺のこの世界での名も想影真心だ。今は黒に染めてるので分らないだろうが、それでも生まれて間もない頃は苦労したもんだ、力加減を間違えるとペンや食器を折砕き友達と遊ぶ時全力を出そうものなら全員からハブられるし。まあ人間って言うのは良くも悪くも異端は嫌うということだ。俺からすればこの世界にいる五割まではいかににしても結構な割合の人間が異端であり異常だけど。

まあ昔は俺も調子に乗ったもんさ、人外クラスの力を持って、しかも転生できるなんて狂喜乱舞したもん。けどやはりこの世界でも人類最終のスペックはダントツだったらしい、誰も彼も俺と対等な人間はいないし下手をすれば化け物扱い。一回だけだが誤って人を殺しかけた事がある。

当然といえば当然だが辛いもんは辛いのだ。俺は一回車に轢かれた事があるのだがその時ほぼ無傷だったのを知ったの親は俺を見世物にしようとした。無論それを知った俺は両親をもうこれでもかというくらいボッコボコにしてやった。そのせいで縁を切られたが親戚

に引き取られ、今はちよつとしたマンションで一人暮らしだ。

兎に角俺は元一般ピーポのせいがこの力を持ったのは嬉しいが、それでも無駄な争いはごめんなのだ。しかし親を叩きのめす時に気づいたんだがどうも俺は他人の死や傷付く姿に対し酷く冷めた反応しか出来ないようだ。前の世界じゃ目を背けたくなるような光景でも平然としてられるのは、おそらく俺の肉体が関係してるんだと思う。だから俺は人を傷つけるのが嫌だ、闘ったりすると自分の異常さ加減が分かるし、自分本位な考え方だが別に誰かに迷惑をかけるわけじゃないんだからいいだろう？

説明が長くなってしまったが、今は俺は登校中。俺の登校時間には様々な光景が見られる、例えばさっき言った女が男共を上空へ吹き飛ばすという光景だ。しかもこれが日常だというのが恐ろしい。

不良達が女

川神百代に挑んでいくのだがそれを尽く

川神百代が吹き飛ばす、叩き飛ばすというものだ。何故かそれを見ようと寄ってくる観客までいるし・・・それよりあの不良達は何故懲りもせず大怪我を負いに行くんだ？Mか、そうかMなんだな

「まあ俺には関係ないか」

「何がですか？」

「うお!？」

いきなり声をかけられて驚いて振り向くと、そこには友人の妹、優菜ちゃんがいた。

この子は友人の家に遊びに行った時に会って、その時何故か大層懐かれたのだ。因みに十四歳中学二年生だ。

「おはようございます、真心さん」

ニツコリと笑いながら俺に向かって挨拶をしてくる優菜ちゃん、後ろの乱闘騒ぎには興味がないようだ。

うん、この子の笑顔を見ると心が癒されるね。

「おはよう優菜ちゃん、法規は？」

法規、優菜ちゃんの兄で同じクラスの俺の友達だ。

「兄さんは先に行ってしまったよ」

「そうか、じゃあ俺も急ぐとするかな」

「そうですか、では」

そう言い優菜ちゃんはゆっくりとした足取りで中学に向かっていった。

「いい子だねえ、まったくあの子の爪の垢でも飲ませてやりたいよ」

そう言い川神百代と不良集団を一瞬見る、というより無意識に睨ん

でしまった。

「まだ時間あるからゆっくり行こうかな」

とりあえずあの人間兵器もとい、川神百代と不良、観客を視界に入れないようにして俺はコソコソと学校へ向かった。

その途中、馬車を猛スピードで引くメイド、忍足あずみとそれに乗りながら高笑いをしながら登校する同級生の九鬼英雄を見て軽く鬱になりかけたのは毎日の事であるので割合する。

爽やかな朝＋鬱陶しい人〓決闘・・・決闘！？

二年C組

俺が所属しているクラスだ。

このクラスは比較的に武道とかは程遠い人間が大半を占めている、それに俺の数少ない友達もいるし。おそらくけど学校側が意図的にそういう風に分けたんだろう。こういう配慮だけは感謝感激だ。

「おはようさん、真心」

「ああ、おはよう法規」

机に突っ伏していた俺に話しかけてきたのは俺の学校での数少ないの友人、天吹てんぶきほうき法規だ。

コイツには色々世話になっている、入学当時から他の奴等から浮き気味で精神的にも参っていた俺を救ってくれたのは他でもない法規だった。

最初は俺も突っぱねていたが最終的に俺が根負けして一緒に行動するようになった。今では俺達は無二の親友だ。

因みに天吹ってあの天吹正規庁とは何の関係もない、がこいつもかなりの身体能力と特殊なスキルを誇っているし、それにちよつとだけ俺がアドバイスしたときもあつたせいかな恐らく今の法規では並の奴らじゃかなわないだろう。俺もそうだし法規もそうだがこの世界には機というものが存在しそれを保有している。まあ俺はそんなに使用しないしな、戦いはそうだけどそんな切羽詰まった状況もない

し何よりそれ以上にスペックが高すぎてそんなもの使ったらどうなるかわかったもんじゃない。

因みに他にいる友人もちよつとした奴らだったりするが、まあそれは今度と言うことで。とりあえず戦闘能力は常軌を逸しているという事だけは言っておこう。多分試合なら分らないが死合なら確実に俺の友達たちに勝機があるだろう。

まあ好んで戦いを俺に挑んでくる奴らじゃない……まあ挑んでくる奴もいるがいい奴らだからな。何故か憎めない、いい奴らだ。

「相変わらずやつれているね」

「言い返せないのが悔しいが、これに関しては高校卒業まで治る気がしない」

「いつそ全員の目の前で大暴れでもしてみたらどう？ スツキリするかもよ？」

「冗談、大体俺が本気で暴れたらこの学校灰燼と化すぞ、しかも万が一にもそんなことしないって分って言ってるだろ」

「違うないね。ああそれと最近川神一子がところ構わず喧嘩もとい、決闘を仕掛けてきているらしいよ？ 君は平凡を目指すくせに厄介事に巻き込まれるときがあるから気を付けなよ」

「わあってるよ、大体今まで絡まれなかったんだあと二年くらい乗り切ってやるさ」

「まあがんばりなよ、僕もなるべく味方してあげるからさ」

「なるべくじゃなく全面的にしてほしいんだが」

「あはは、そうだね。そうさせてもらうよ」

ガラガラ

「全員席に着け、HRを始めるぞ」

「おっと、先生が来たみたいだ。席に戻るよ」

「おっ」

あれからHRと午前の授業が終わった、特に何かあったわけでもない
のでその辺は割合させてもらう。

現在は朝食を食べ終わり読書中だ、読んでいる本は人の心の掴み方、
実用書だな。

ガラガラ！

「失礼します！」

突然扉が開きクラスの中に入ってきたのは、髪を後ろで束ねた利発そうな娘だった。

あれ、あの子確か、川神一子か？半年位前に風間ファミリーやその他の俺が進んで関り合いになりにたくない部類の人間を紀貴にピックアップしてもらったから覚えている。

それにしても何しに来たんだ？朝法規がいろんな奴に決闘を申し込んでるって聞いたけど、このクラスってそういう武術とかやってるやつ少ないだろ。つかいないんじゃない？法規と俺以外。俺らは人前で見たことないから知らないだろうし法規は言わずもがな。

つっても俺は武術というより護身術と幼い調子乗ってた頃に習得したネタワザとくらいだが。

ってあれ？何で俺達の方に向かってくるんだ？イヤマジ来ないでお願いだから。

なんて心で叫んでいると川神一子とかいう女は俺の机の前まで来た。

「君が想影真心ね！私は川神一子！！私と勝負しなさい！！」

と。のたまった、ついでに俺の机にバン！！とワッペンを叩きつけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ジーザス。

「いや確かに俺の名前は想影真心だけど？何で君と勝負しなきゃなんないんだ？」

「アンタ登校の時、お姉さまの前を通り過ぎる時気配を消してるでしょ、それに今日お姉さまを睨んでたでしょ！それに大和が最近あなたの事調べテルの見たのよ、身体能力学歴ともに平均ジャスト！どう見てもわざとしか思えないって！」

しまったー！無意識に気配を遮断してたのか俺、しかも睨むくらいいいだろ！あんなのに絡まれるのは御免だと心も体も言っている証拠ではあるが、これは拙いぞ！つか見られててのか、不覚、なんて様だこんちくしょう！しかもテストの点数くらいで人の事調べようとすんなや！

しかも大和？あの風間ファミリー軍師君か・・・・・・・・・・あの野郎、人識君ヨロシク殺して解して並べて揃えて晒してやるうか？クソ！

「いや、いや確かにちよつとしたそれくらいはできるけど趣味兼護身術としてやってるだけであって・・・」

「嘘つくな！あんなうまく気配の消しといて何が護身術よ！とにかく決闘しなさい！！」

「やだ、この決闘システムは一方的に相手に挑めるが相手がそれを

認めなきゃ成立しないはずだ」

「むゝ！！なんで勝負してくれないのよ！？」

「痛いのがやだし疲れるし金にもならん」

大体俺は手加減しても殺しかねないんだから、死人出しかねない勝負なんざやってられるかってんだ！

「うう・・・ッ！だったら私に勝ったらどんなお願いも叶えてあげるわ！！それでどう！？」

別にして欲しい事なんかないしなあ。

「いい機会じゃない真心。どうせ川神さん受けるまで諦めないと思うよ」

法規？何を言ってるんだ？大体諦めないだろ、どんだけタチ悪いんだよ。

「例えばこの勝負に勝ったら、ファミリーを含めて金輪際俺に関わるなとかさ」

「それを守る保証はないだろ」

「嘘とかは吐かないと思うよ、寧ろ騙されたりするタイプの人間っぽいね」

確かに、けどそれでまた興味を持たれたら嫌だしなあ・・・うゝん。

「仕方ないな。勝負してやる、だが俺が勝ったら今後一切俺に君の知り合い、主に女共を俺に近づけるな。だがお前が勝ったら俺も何か君の願いを聞いてやる」

「いいわよそんなの、勝つのは私なんだから!!」

よし！言質は取った！！これでコイツに勝てば俺の学園生活もちつとは楽になるだろう。

まあこれがどれ程安易で油断した選択だったか、俺が思い知るのは遠くない未来なのだが……。っていう伏線どう？まあマジでフラグ立ちそうで怖いから言わないけどさ。

恐怖と苦痛は同義ではない。

川神一子との決闘を受けてから十分後、運動場の中心に俺達は向かい合い立っていた。あの問答のあとは特に問題はなかったがクラスメイトの目が非常に痛かった。

まあ当然だ。相手はあの川神百代の妹、しかも今まで一般市民と思っていた奴がだ。法規はニヤニヤ笑ってたからデコピンしておいた。

「ヤベエ・・・鬱になりそう、てかいつそ鬱になった方がいい気がしてきた」

「？何いつてんのアンタ」

「いや何でもない」

ハア・・・周りからは風間ファミリーから俺が最も目に付けられたくない奴とかの視線をビンビン感じるし

早計だっ

たな。今更ながらだが怨むぜ法規、いや俺の責任か。

まあ後悔しても遅いか、まあ川神一子が約束を違えることはないと思うが保険は掛けておくべきだな。

「では、武器の使用じゃが」

「私はモチロンこの薙刀よ」

そう言ってレプリカの薙刀を頭の上でブンブン振り回した。

「識真心君は如何するかの？」

ああ武器ね、如何しようかな

ぶっちゃけ真

正面から先生どうとう戦う気なんかひとつかけらもなんだけどな、既に仕込みも終わってるし。

それに何より基本スペックからして俺と同等に戦り合える人間なんてそうそういないしね。

「とりあえずは素手でいいです」

「とりあえずとな？」

「アンタ・・・舐めてんの？」

へ？ああ確か武人って本気で戦わないと侮辱に値するんだっけ？だったら何で殺し合いをしないんだ？いやされても困るけどさ、誇りだなんだというのならそれを他人に押し付けるのはただの横暴で暴力で武術うんぬんより、ただの性質の悪いチンピラと同じじゃないか？

「別に、俺は武人じゃないし勝てれば他はどうでもいい。何より日常的に武器持ち歩く様な異常者と一緒にしないでほしいんだけど」

ビシッ！！

殺気！！？

咄嗟に振り向いてみるとそこには怒気と殺気を同時に放つ川神百代

の姿が……。怖いなオイ。大体起こるってことは凶星だろ？見
てる限り川神百代は素手が武器らしいけどさ。

この勝負に勝てば関わることもないし問題なんかナッシング。ま
あ最悪、本当に太陽が今この瞬間爆発するほどの確立しかない敗退
率だけど敗退したとしても進んであいつ等と関わるなんて愚かな真
似はしないっつの。

「んじゃま、さっさと始めましょーや」

ゴゴゴゴ……

おお、殺気が高まつ……。た？怒気だか殺気だか本当のところ素人
の俺には分からなかったりするんだけど。大体俺の友達の殺気から
すれば鼻で笑えるほどだ。

「で、では双方準備はいいかの？………始め！！！」

「川神流、川神一子！」

名乗りとかあるのか？それとも苛立ってるからぶちのめす宣言みた
いなものか。

「橙なる種、人類最終 想影真心」

まあ建前だしいいかな？どうせ意味も分からないだろうし。

「行くわよ！」

川神一子がそう言い前に出ようとした瞬間、彼女は異変に気がつい

ただろう。

「へ？あ、あれ？体が動かない・・・」

「何！？」

「貴様何をした！」

「別に、強いて言うなら催眠術。オカルトチック過ぎて信用できない櫃には洗脳とを考えてくれていいかな」

「クツ、どうやって！」

「どうやって？そんな方法なんて腐るほどあるだろう、アンタは俺の動きをみただろう、言葉も聞いた。まあこれは正直かなり簡易的なものだからな、破れる奴は破れるぞ、発動条件はこの場合俺の言葉、というより声。音による催眠だね。所詮の俺のはオリジナルには及ばないけど。俺と決闘という手段で相対した時点でアンタは罠にかかってたんだよ」

人類最終の体をもつてしてもこの技術の最高峰ハイエンドに達している人間には届かないだろう。それぐらいこの術を教えてくれた人のスキルは段違いに高かった。なんであんな人が普通にBarなんてやってるのか不思議でしようがないな。

「要するにやりたい放題というわけだ」

「くっ・・・」

と。言いながらも俺はこれからどうするか迷っていた。別にこのま

またこ殴りにしてもいいんだけど流石に女の子にそんなことするの
も正直気が引けるといつか。大体それがしたくないからこんな志知
めんどくさい方法とってるんだ。本当だったらあの薙刀を押し折っ
て腹を四割程度の力で殴ればそこで決着だ。

「あれだ、首チョップに決定」

漫画とかである首の後ろに手刀を決めて意識を奪うやつ、これ実は
かなり危ない。実際にやると俺は経験済み、というか人類最終の学
習能力をフルに利用して習得済みだからいいけどこれって延髄から
走る脳への電気信号に直接影響を与える技術だから素人がやるとほ
ぼ確実に失敗する上誤って成功すると本当に死亡したりとか体に障
害が残ることがあるらしい。漫画とかで軽くやってるけど本当は反
則スベックなしじゃかなり練習が必要な高等技術だったりする。

「ちょ、何する気!？」

「何って今言ったじゃん首チョップだって首チョップ、大丈夫俺う
まいから一瞬で気絶できるよ」

「したいわけないでしょ!？」

肢体したくない以前に俺の都合の方がこの場合優先だからね？

「さて、はいドーン」

と。首に手刀を決めて気絶させた。あまりにあっけない決着だけど
一番楽な方法じゃね。流石に喧嘩（決闘）慣れしてない俺じゃ動い
てるこの人の首に手套決めるのは怖いし。成功させる自信はあるよ？

「ワン子!？」

「どうしたんだ!」

「お前!ワン子に何をした!？」

「だから首チョップだって。あれ、実はマイナーな技だったりする?
てか勝負ありですよね学園長」

「……………わかった、この勝負想影真心君の勝ちじゃ」

「ですよ〜」

これだけやってまだ戦える人間はいないだろ。てか気絶しながら襲い掛かってくる人間なんてもはやホラーだわ。

もう帰ろう。そう思って後者の方へ向くと猛烈な勢いで俺に突貫してくる川神百代の姿が一瞬目に入った。

「怖いなあ、だから嫌だったんだよ」

「ぐう!」

だがそれも一瞬で止まる、というより無理やり一時停止をかけたかのように止まった。さっき言った事聞いてたのかな、俺は声でだって発動は可能だって。正確には脳内干渉けど。勿論精神干渉も可能だがこれはもう達の悪いどころの話じゃないスキルなので使いたくない。単純に使い勝手が馬鹿に体にいいのもあるけどそれ以上に凶悪で最低すぎるスキルだからだ。幻覚の世界を見せその中で殺すことも可能、要するに能に勝手に自分が死んだと判断させて声明を停

止させるなんて事も可能だ。性質悪すぎだろ。

「俺がやってるのは催眠術、正確には脳内干渉。切っ掛けがあれば誰にだってかけれるんですよ。川神先輩、例えば貴女でもね、人が人である限り俺のコレから逃れることは叶わない。例外は、ない」

とは言わない。人類最強、最悪レベルの意志の強さとか俺と同じかそれ以上に催眠系スキルを網羅してるんだっただけ。人間の脳や身体の構造上これから逃れる術はない、機械の体にもしない限りな。

「別に殺しちゃいませんし、身体的にも精神的に後遺症なんて残りませんよ。安心して下さい、それに僕は武人でもなんでもない例えるなら非戦闘員だ」

人類最終の肉体をもって言う言葉じゃないが、まあ心の持ち様の問題だよね。

「だから俺に戦いを挑んだことそのものが間違いなんですよ。僕は貴方達とは違う、特殊な技法を持つてはいるがあくまで一般人、別にスポーツ感覚くらいならいいですけどこういうのはマジ簡便なんです」

「では何故決闘を受けた？」

依然俺を射殺さんばかりに睨む川神百代、まあこの程度の殺気じゃ俺は揺るがないけど。

「約束したからですよ、俺が勝ったら金輪際先輩を含めた貴女達が俺に関わらないようにしてくれと」

「な！」

「別に不思議じゃないでしょう？何度も言いますが戦いとかホント嫌いなんですよ、こんな風に人の恨みとか怒りとか買うのも嫌いだ。今回は俺のこと怖がって俺に関わらなくするためだったんですけど、逆効果みたいでしたね、ほんとすいませんでした」

そう言って頭を下げる、上げるとちょっとびっくりしたような顔をした川神百代がいた。

「それじゃ俺は失礼します。多分一子さんは十分ほどで目が覚めると思いますし貴女のも同様ですから。それじゃ」

そう言っただけで俺はその場を去った。それでも俺に関わらないことを祈るばかりだ。

これなんてギャルゲ？

「あゝいったゝ」

決闘が終わり、保健室に行こうと思ったが血が出なくなったので止めて普通に教室に戻った、がまだ痛みが引かないため机に突っ伏し唸っている。

「あんなことするからだよ」

まあ自業自得以外のなんでもないんだが痛いものは痛いんだから仕方ないだろ？

「でも決闘には勝ったんだから結果オーライってことだね」

「だけど明らかに川神先輩の怒りを買っちゃったしなあゝ」

勝負を挑まれることはないとは思っけど、恐いなあ……。

「それより今日放課後家来ない？優菜も今日早いし」

「優菜ちゃんなら朝会ったぞ、つか何で優菜ちゃんが出てくるんだよ？」

「いやゝ、優菜が勉強教えて欲しいって言っててね、僕あんまり人に教えるの得意じゃないから真心なら適任かなって思ったんだよね」

「勉強？まあ別にいいけど」

「いやホント助かるよ、最近優菜があんま僕の言う事聞いてくれるくて困ってたんだよ」

「優菜ちゃんが？そういう風には見えないなあ、まあいいけどさ」

「それより今回の件で余計に君友達でにくくなったね。元々君ってあんまり友達とか作る気なさそうだったけど」

「そついやこの一件で俺の事を学長どころかほとんど全校生徒が知ることになったわけか。」

「やっぱりメンドクサイことになりそうだなあ……………」

「まあその点については諦めなよ」

「そうだな諦めるしかなさそうだし。」

時間が飛んで今は放課後、僕は法規と一緒に法規の家に向かっていった。法規の両親は互いに警察関連の仕事に就いている。法規も将来はそうになりたいと言っていた。

「そっぴや優奈ちゃんは？部辰はどうなってるんだ、俺達の方が早く着いちまうんじゃないか？」

「優奈は陸上部だけど、今は自主練が主らしいから今日はもう家にいると思うよ」

「ふうん っておいも着いたぞ」

話をしている間に法規の家に着いたみたいだ、そっぴや家に来るのは久しぶりだな。

「それじゃ入ろうか」

そっぴいながらドアを法規は中に入って行った っておい
優奈ちゃんなんで鍵閉めてねえんだよ、いくらなんでも不用心すぎ
だろ。

「おじゃまします」

「とりあえず優奈を呼んで来てくれないか、俺はお茶とかの準備してくるよ」

「は？そんな気遣いしなくていいぞ」

「友達とはいえ家に来た客人に茶を出さないわけにはいかないからな、ほらさっさと優奈を呼んで来てくれよ」

「あ、ああ」

「まったく何をそんなニヤニヤしながら急かしてるんだ？
ん
？だったらなんで客に妹を呼びにいかせてるんだ？」

「えっと確か優奈ちゃんの部屋って二階に上がって右だったよな」
場所変わってないといいけど、まあそう簡単に部屋の位置なんか変えないか。

「優奈ちゃん、遊びに」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

優奈ちゃんのであろう部屋のドアの開け中を覗き込むと、そこには
下着姿の優奈ちゃんがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・失礼しました」

スウーッと出来るだけ静かにドアを閉めて、それから一言。

「これどこのギャルゲー？」

とりあえず法規をシバこう。

そう思い立った俺は階段を降り、リビングに向かった。

「法規」

「あれ？どうしたの真心そんな顔して、ドア開けたら優奈の着替えシーンでしたとか？あはは流石にそんなどこぞのギャルゲ みたいなこと現実にあるわけないよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「え？あれマジ？」

「法規一生の頼みだ、一発でいいから本気で殴らせろ」

思いつきり、それこそ自分の握力で手が砕けそうなほど握り締めた拳を振りかぶりそう法規に言った。

「いやいやいや！ちょっと待ってって！ワザとじゃないししかも流石に予想外だつて！！ちょっと頼むから怒りを抑えて！そんなのくらったら僕文字通り爆散するからね！！？」

「安心しろ、痛みすら感じず逝ける筈だ。だから散れエエ！！！」

The 爆散。

なんてことにはならず寸止めにした。ただその拳圧で法規はブツ飛び空いていた窓から庭まで飛んでき、そのまま草むらに突っこんだ。

手加減したんだけどな……。まだまだな俺も。

「びつくりした、それになんか背中が痛い」

それから五分後、法規が何事もなかったかのように戻って来た。

「俺は心が痛いよ、良心がズキズキとナイフに刺されたが如く」

あと申し訳なさで自殺したくなった。

「いや別に気にしなくていいと思うよ」

「小学生とかだったらそれだけで済むかも知れないけど、優奈ちゃんも中学三年生だぞ!？」

下手したら俺捕まるんじゃない？

「いやいや優菜としても本望だと思うよ?」

「お前は妹を痴女かなんかと思ってんのか!？」

「はぁ……。真心、君はバカだな」

「今だけはお前に言われたくない」

これから優奈ちゃんとどんな顔して会やいいんだ？

「どうすんだよ、もう俺帰っていいか？」

優奈ちゃんに会わせる顔がないよ、超帰りたい・・・。

「とりあえず顔洗って出直してくる」

「顔ならここでも洗えるけど？」

精神的な意味だっつーの！！

そんなやり取りをしていると、二階からドアが開く音が聞こえタンタン、と階段を下りてくる足音が聞こえてきた。そしてそれからリビングのドアが開きそこから優奈ちゃんがちょこつと顔を出してきた。

「えっと、こんにちは」

「あ、ああこんにちは。えっとさっきのことなんだけど」

俺がそう切り出すと、優奈ちゃんは顔を真っ赤にして顔を引っ込めてしまった。どうしよう、完全に怯えさせちゃってるよ。つかおい法規、何退散退散とか言いながら窓から逃げてやがる？あとで覚えてろよ。

「えっと　ごめんね優奈ちゃん、さっきはノックもしないでドア開けたりしちゃって」

「い、いえもう気にしてませんから・・・その、真心さん今日は何で家に？」

法規の奴、優奈ちゃんに連絡していなかったのか？

「法規の奴に優奈ちゃんの勉強の手伝いをしてやってくれないかって言われてね」

「兄さんが？えっとありがとうございます」

「いや別に気にしなくていいよ、それより今日は帰った方がいいかな？優奈ちゃんとしても気まずいだろうし」

寧ろ帰りたい。

「い、いえ別にそんなこと気にしないでください！私は気にしてませんから！..」

「そ、そう？ならいいけど・・・じゃあとりあえず部屋に行こうか、法規の奴はどこか行っちゃったしね」

「はい！」

それから俺は優奈ちゃんの部屋で勉強を見てあげている。もう三年生だからか勉強する範囲も大変だそうだ。第一志望校は何と川神高校らしい、確かに家も近いけど俺としては遠慮して欲しいんだけどそのことを伝えると、

涙目で「イヤですか？」

と聞いてきたので反射的に前言を撤回してしまった。

俺って意思弱いな。それより優奈ちゃんって彼氏とかいるんだろうか？いるとしたら俺と二人きりつてのもまずいんじゃないか、法規もこの家にはいないみたいだし。

「優奈ちゃんて恋人いるの？」

「へえ！？い、いませんですけど・・・どうしてそんなこと聞いてきたんですか？」

何故か期待に満ちたような顔で聞いてくる優奈ちゃん、どうしたんだ？

「いや、いたとしたら俺と二人つきりつてのもなんかマズイ気がしてね。まあいないんだったら　　いいのか？いやもう中学三年生だし世間的にはマズイ部類の状況なのか？」

「べ、別に私は気にしてませんしそれに真心さんは安心できるからそんな変な心配はしてません、真心さんこそ彼女とか　　いるんですか？」

「いや、俺はあんまり高校で人間関係は広くないし女子の知り合いなんかいないからね」

まあ今日に敵対相手ならできたっばいけど。

「そ、そうなんですか！良かった！！」

いや、俺の人間関係が広くないのがそんなに嬉しいか？泣くぞ。

「えつとですね、真心さん明日暇ですか？」

明日？まあどうせ部活動は未所属だし問題はないか。

「暇だね、特に用事はないけど 明日も勉強の手伝って欲しいってことかな」

「いえ、その真心さんがいいのなんですけど 明日ちょっとお買い物に付き合ってくださいませんか？」

顔を真っ赤にしながらそう言ってきた優奈ちゃん。つか買い物かなんか欲しいものでもあんのかな？

あれ、これって見方を変えればデートじゃない？
やね？

「別にいいけど、優奈ちゃんと二人で？法規とか友達とかは誘わないの？」

「え？それは 兄さんと友達も用事があるようで真心さんしか 」

そういうことか、なら仕方ないよな。

「分った、じゃあ明日はもうちょっと早く帰ってこれるよう努力するよ」

「ハイ!!」

まあそれからは普通に勉強の手伝いをし、帰ろうとしたときちょうど法規が帰って来たので軽く（ふきとぶていど）デコピンをして帰

つ
た。

転校生は時代錯誤？

朝、俺はいつも通りの時間に起きて何事もなくいつも通りのことをして家を出た。それから通行はなるべく
というより
確実に風間ファミリーに見つからないように気配遮断をつかって登校した。

途中俺に気付かなかった人力車メンドに轢かれかけたがそれ以外は問題はなかった。

登校して暫く椅子に座り本を読んでいると、ヒヒーンという鳴き声と共に金髪の女性が登校してきた。

「いや何故乗馬？」

「さあ趣味なんじゃない？」

趣味という理由で学校に馬で登校されるのも困ると思うんだが・・・。

「それより法規、お前今日予定あるのか？」

「いや、なんで？」

ん？聞いてないのか？

「今日優菜ちゃんと出掛け「あー！！そうそうちょっと用事があっ

「たんだー」無茶苦茶ウソ臭いぞ」

「まあいいじゃないか、優菜のこと宜しく頼むよ」

「まあ頼まれてはやるけど、それよりあの金髪少女はなんなんだ？あれだけ目立つ容姿してたら噂になってもおかしくないと思うけど」

大体在校生なら俺が知らないってのもおかしい、名前までは把握してないがあれだけの見た目なら俺は一応顔くらいなら把握しているはずだ。

「転校生じゃない？乗馬で登校する人なんて聞いてことないし何より僕自身知らないし」

「ふーん。まあ厄介事を持ち込んでくれなければ別にどうでもいいけど」

「そだねー真心の場合はそうだろうね」

「それより先生遅くないか？もう朝のSH始まっててもいい時間だぞ？」

もう八時二十分過ぎ始めてる、いつもならあの先生は通常の二分位前に初めて早めて終わるんだけどな。

今より第一グラウンドで、決闘が行われます。内容は武器ありの戦闘です、対戦者は川神一子さんとクリスティーア・ネ・フリードリヒさんです。観戦する人は

「これが理由なんじゃない？」

「てかクリスティアーネって誰だ？」

完全に外人の名前じゃねえか。

「多分さっきの乗馬の人じゃない？」

「ああ確かにそうかもな、で？どうするんだ、決闘が始まっちゃまったとなると始まるのが遅くなるぞ？大体朝っぱらから始めるなよ」

他の奴等の迷惑を全く考えてないな。まあそれは昨日の俺もそうか。

「見に行こうよ、大体君はもう風間ファミリーには手出しされない身なんだからさ、スポーツの観戦程度に思えばいいよ」

「血が飛び散りかねないスポーツの観戦つても嫌なもんだけど、まあいいか。暇なものは暇なんだし」

そう言い俺と法規は立ち上がりグラウンドに向かった。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！二人とも前へ出て名乗りを上げよ！」

厳かな声でそう宣言したのは、川神鉄心学長

「お、ギリギリセーフみたいだね。間に合った間に合った」

「どうでもいいけど早く終われ」

なるべく風間ファミリーから離れたところまで移動した俺達は二人に目を向けた。

「どうやら川神さんは真心と戦った時と同じ薙刀を使うみたいだね」

「そうそう愛武器つてのは変えられるもんじゃないだろ。俺とかお前じゃあるまいし」

「確かにそうかもね。あ、転校生さんはレイピアか」

もちろんどっちもレプリカだが、レイピア ね、長巻と戦
いための方法は心得てるのか？

「ねえどっちが勝つと思う？」

「さあな、武器の有利でいえばもちろんだけど薙刀だな。あれは使い方を誤んなきゃ相当な脅威になる武器だ」

薙ぐことはもちろん突き等あらゆる攻撃方法を有してる。気を保有してない非力な女性でも遠心力を利用した強力な攻撃が出来るのが薙刀だ。川神一子が杖術や棍術にまで精通してるとは思えないがちよつとでも噛んでいればそれだって十分な脅威だ。

「実力は？」

「さあな、言っちゃ悪いけど川神一子は努力で力をつけるタイプだ、才能にはあんま縁がないな。それに比べてあのフリードリヒ・・・だったか？はかなりの才能があるように見える」

ま、所詮客観的に しかも俺みたいない武に関してはそこまで精

通してない奴の言葉だからな、そこまで頼りになる言葉じゃないか。ただ川神一子のことは実際に刃は交えなくても対峙したんだ、ちったあ分かってるつもりだ。

「俺はフリードリヒが勝つ方にかけるな、大体俺と戦った時のダメージ回復してるのか？まあメンタル面だけのアタックだけだったけどさ」

「まああの子、単純そうだしね。一日経ってるから忘れてるんじゃない？」

延髄に一撃食らわしてるのに次の何喰わぬ顔で決闘なんてされるとちよっと心配してたこっちからするとかなり釈然としない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあいいか、始まるみたいだな」

二人は武器を構え

一気に前に飛び出した。

最初に仕掛けたのは川上一子、薙刀のリーチと遠心力を生かした様々な薙ぎや突きで敵を寄せ付けず倒すセオリー通りの戦い方だがこれがどうして中々に強力だ、現にフリードリヒは攻め切れずにいた。

「ひゅう、凄いね川神さん。まともに戦わせてくれなかった真心君との決闘じゃ全く分からなかったけどこれじゃフリードリヒさん攻め切れずに負けるんじゃない？」

確かに、川神一子の攻めにフリードリヒは防御一辺倒の姿勢だ。だが

「攻撃が単調すぎ」

「え？そう？そういう風には見えないけど……」

「攻撃パターンが単調すぎるんだよ、自分の技を信賴するのはいいけどあれだけ繰り返されればいやでも付け入る隙は見つけられる」

「へえ……あ、確かに攻撃の順が一定だね」

と、話している間にフリードリヒは川神一子が袈裟掛けに振り下ろした薙刀を下がって避け、それから足を前に出し薙刀を踏んだ。

その為体勢を崩した川神一子の鳩尾にレイピアによる強烈な一撃が見舞われた。

「あれは決まったな、気絶までしないのは流石だけど暫くは動けないだろう」

俺だったらどうだろう？自分で自分を傷つけるのはまだしも他人からの攻撃をまともに受けたことはないからなあ、やっぱり気絶しちゃうのかな？まあ関係ないか。

「さて戻ろうか真心「まで想影真心」わぁーお」

決闘も終わりさっさと教室に戻ろうと思った矢先、俺達の前に川神百代が現れた。

「なんですか川神せ「私と決闘をしろ！！」」

この野郎 じゃなかったアマ昨日の俺の話全然聞いてなかったのか？

「断固辞退させてもらいます、決闘は両者の同意が無いと行えない筈ですよ？それでは失礼します」

そう言つて横を通り抜けようとする今度は金髪少女ことフリードリヒから声がかかった。

「貴様！決闘を申し込まれながらそれを無下にするとはいそれでも武士か！！」

いや武士じゃねえよ。あ、この人乗馬で登校したのってまさかの時代錯誤か？いや流石にないか。

「俺は武士じゃありませんし武人でもありません、ちょーーーとだけ腕の立つただの一般市民です。てか川神一子、俺はお前に勝つたら君の知り合い主に女を俺に近づけさせるなって言つたよな」

約束ぐらい守れよ、守ってくれないと俺昨日やったこと骨折り損の草臥れ儲けじゃん。

「あ、忘れてた。でも私じゃお姉さまは止められないよ？あとワン子でいいよ！」

まだ満足に動けないのかちよつと足がふら付いてるがそんなことあどうでもいい！！つか昨日俺のやった仕打ちに対してニツクネームで呼ぶことを許すとは　ちよつと感心。

つていやそんなことはいい。

「それじゃ昨日の決闘って意味無いじゃん、つか止める努力ぐらい

しろよ」

「え〜〜」

「え〜じゃねえよ、あと法規お前も説得手伝え」

「え、ヤダ。目付けられるの怖いもん」

もん、じゃねえ!!

「兎に角決闘は受けません、それでは」

そう言つて俺は今度こそ川神百代の横を通り過ぎた。

「行くぞ法規」

「りょーかい」

そして校舎に入る瞬間、

「逃げるのか？」

と。そう問われた。

「ええ、だって痛いのは嫌ですから。あと忘れてるんじゃないですか？何度も言いますけど僕の脳内干渉 昨日川神一子にやったのは貴女にだって有効なんですよ、やろうと思えばワンテンポで洗脳可能ですから、要するに俺と戦いたいならまずそれを看破するだけの實力をつけてくることですね」

まあ実力がいくらついても知識と催眠に刃向かうだけのメンタル力がないと何の意味もないけど。それに俺の本当の武器は言わなくとも分かると思うが人類最終の力を最大限利用したインファイトだ。

こと戦わず勝つ方法なら誰にも負ける気はしないし、何よりそれ全てを看破されても肉体面でも負ける気はない。

さっさと教室戻ろう。

デー・・・否これはお出かけである

とりあえず決闘騒ぎが終わって俺達は教室に戻ってきたわけだが。

「また厄介なのが転校してくるわワン子さんは馬鹿だわ・・・
やってらんねえ」

もう無理しても転校したくなってきた。でも金が・・・あと
友達・・・。

「大丈夫だつて、先輩もあの人達も馬鹿正直な猪武者みたいだし闇
討ちみたいなのは絶対してこないから絡まれたら適当にあしらえ
ばばいいでしょ」

気楽そうに、というより他人事のようにそう笑いながら話す法規を
ぶん殴りたくなるのを抑えながら睨みつけた。

「じゃあおまえが俺の代わりをやるか？想操術で俺とお前を入れ替
えてやるうか？」

想操術は簡単に言っしまえば代表的な催眠術から世界そのものを
入れ替えるようなチートみたいな真似すら可能な応用の広い脳内干
渉術だ。

他者の脳内に干渉し幻覚を見せるのは勿論、擬態や存在そのものを
意識の外に外すなど色々なことが可能だ、やろうと思えば幻覚の中
で対象を殺しそれを脳内に叩き込めばそれだけで脳は自身が死んだ
と判断し生命を停止させる、骨を折る幻覚を見せれば実際は折れて

いなくても痛覚が残ったり筋肉が断裂してしまったりとか。

実にエゲつなくこれ以上ないほどの非戦闘スキルだ、何より幻覚だと理解しようとしてもできないというのが何より怖い。

「いや遠慮しとくよ、僕だって他の子ならいいけど川神先輩と対峙する覚悟はないな」。大体僕は君ほど強くないって」

「俺だって強くはないって」

強いのは俺じゃなくて俺の体、メンタル面じゃ俺はオリジナルには遠く及ばないし俺自身まともにやり合ったことなんて数回、なににより全力なんて対人で出したことすらない。

「兎に角、成る丈関わらないようにするしかないわけだ」

「そうだね、まあ僕もなるべく協力するよ」

まあ法規がバツクにいるなら安心か……。？いやなんか怖いな。

「どうでもいいけど授業いつやるんだ？」

「確かあと五分で始まるね、まあ一時限目は現文だし用意してさっさと席に着こう」

「そだな、授業に集中すりゃいやなこと忘れれるだろ」

授業が終わり放課後、休み時間の度に風間ファミリーの奴等が来ないかと戦々恐々としていたが幸い一度も俺の目の前には姿を現さなかった。

「さてと、法規お前やっぱ今日一緒に来れないのか？」

「優菜の話？ いやゝごめんね、ちょっと込み入った用事でね」

スゲエ嘘臭い。大体こいつは成る丈面倒事には関わりたがらない、まあ関わったとしても絶対に当事者にはならない、だから込み入った用事なんてあったところでこいつは絶対にすっぱかすか違つところから手を回すに決まってるのだ。

要するに何かを企んでいる、まあ別に俺に不利益になることはしないだろ、そのくらいの信頼と信用はしてる。

「まあ何かは聞かないけど・・・とりあえず俺は先に帰るぞ」

「うん、じゃあね」

それから俺は法規と別れ走って法規の家に向かった。

「邪魔します」

歩いて大体三十分後、法規の家に着いた俺は、家の中に入った。

「優菜ちゃん、準備は出来てるかい」

玄関で声を出して確認を取る、また前みたいな失敗はごめんだしな。

「はい。ちょっと待っててくださいーい」

この声が聞こえてから十分後、優菜ちゃんは私服に小さいバックを肩にかけて現れた。

ぶっちゃけ友人の妹でも可愛いもんは可愛い、要するに優菜ちゃん
は可愛い。

「それじゃあ行こうか」

「ハイ。あ、制服なんですネ」

「ああ待たせちゃいけないと思ってね、駄目だったかな？」

「いえ、気にしてません」

なんでこんないい子が法規と兄妹なんだろう、ほんと不思議だ・・・。

それから俺と優奈ちゃんは天吹家を出て歩きだした。

「そういえば何を買う予定なのかな？」

「えっと服と文房具です」

服と文房具か、それなら別に遠くに行く必要はないか。

「じゃあ近くにあるしそんな時間かからないな。そうだ、時間が余ったらちよっとお茶でもして帰ろうか、近くにいい店があるんだ。俺の奢りだけど行く？」

「え、いいんですか？」

「別に遠慮する必要はないよ」

「じゃあ・・・楽しみにしてますね！」

そして大体十分後、服屋についた。

「それじゃ俺はここで待」ついて来てくれないんですか？」滅相も

ないどこまでもついていきます」

ホント思っただが女の人の涙目とか上目遣いとかって卑怯だと思う、それも俺とかの耐性のない奴らにしたら尚更。

「これなんかどうですか？」

「うん、似合ってるよ。あ、でもさつき同じやつで薄桃色のやつがあっただけあれの方がいいんじゃないかな？」

「そうですか！？じゃあそれにします！」

「え、優奈ちゃん。それ俺のセンスだからあんまり鵜呑みにするのも「大丈夫です！！」・・・ハイ」

まあいいんだけどね。でもこんな会話もう何回もやってるんだ、アドバイスもしないとなんか悲しそうな顔するし、もう手の打ちようがありません。

因みにさつきは下着まで選ばせられそうになって土下座する勢いで拒否した。流石に不味いでしょうよ、つか両親に殺される。

まあ法規なら笑い転げそうだけど。

「優菜ちゃん、そろそろ量も増えてきたし今日はこれくらいにしようか」

「へ？あ、すみません」

「別に謝んなくてもいいよ。さ、会計済ませて文房具買いに行こうか、時間は有限だ」

それから会計を済ませた俺達は、服屋から文房具屋に移動し買い物を済ませた。

まあ文房具屋では特に何事もなく買い物を済ませた、ただ一つ優奈ちゃんが業務用の消しゴムのセットを買おうとしたときは驚いた。

買い物が終わり、俺のお勧めの店に行くことにした、場所はそこまで遠くないからすぐに着く距離だ。

「それじゃ店に行こうか」

「ハイ。でもそのお店ってどこにあるんですか？」

「すぐそこだよ、ただ場所が場所だからあんまり人が来ないんだよね。いいところなんだけど、経営してる人も長年の夢が叶ったとか言ってたけど趣味みたいなものみたいだし」

「そうなんですか、でも場所が場所ってそんな変な場所にあるんですか？」

「うーん・・・まあね。あ、ここだよ」

「へ？でもここって・・・」

俺の立ち止まった場所は某大型スーパー駐車場だった。

「だいじょうぶだいじょうぶ」

そうやって俺はその駐車場のエレベータに入り地下一階のボタンを押した。

「さ、入って」

「は、ハイ・・・」

そして地下一階、エレベーターの扉が開くと、目の前に木製のドアがあり、その上に真っ白な看板があった。少なくとも地下にある店としては目立ち過ぎる上にこの店しかない。理由は簡単、この店の店長が金にモノを言わせたからだ。

その看板に書いてある店名は
『Crash Classic』。

『Piano Bar』

Piano Bar Crash Classicにて

『Piano Bar Crash Classic(ピアノバー クラッシュ クラシック)』。

そう書かれた看板の前に俺と優奈ちゃんは立っていた。

「ここが、真心さんのお勧めの店ですか？」

「そ。まあとりあえずは入ってみてからのお楽しみってことで」

「え、でもここって未成年はまずいんじゃないんですか？Barって書いてありますし」

「大丈夫大丈夫」

そう言つて俺は店の扉を開け中に入った。

「わぁ……」

優奈ちゃんが感嘆の声を上げたその視線の先には、純白の燕尾服に胸ポケットにはハンカチーフをセットし、軽くウェーブのかかった髪を床に着くような長さまで伸ばし肩元近くで一括りにした美男子が、ピアノの前の椅子に座り目を閉じていたからだ。

「相変わらず絵になるよな、曲識さん」

この人、零崎曲識という名前だ。間違つても殺人鬼の一賊ではないが戦闘スキルそのものは少女趣味にも劣らない実力を誇っていたり

する。ていうか少女趣味だったら絶対優奈ちゃん連れてこれないし。

「悪くない、まさか君がこの店に異性を連れてくる日が来るとは予想もしていなかった」

ゆっくりと目を開け、俺達の方に目を向けてそう言う曲識さん。

「その言い方だと彼女みたいに聞こえますよ」

「違うのか？」

「法規の妹です、天吹優奈ちゃんです」

「は、初めまして、天吹優奈です」

「零崎曲識、この店の店長をしている。しかし悪くない」

「そう言うことです、まあ変な勘ぐりはやめてくださいよ」

「そうか、悪くない。だがそちらの方はその立ち位置では不満のようだ」

立ち位置？意味がわからん、とりあえず座ろつ。優奈ちゃんの席を引くのを忘れない。

「それじゃ座ろつか、優奈ちゃんカウンターでいいかな」

「は、ハイ」

「ってあれ？予終さんは・・・」

「ここだよ」

カウンターに座り、あたりを見渡すと白い髪をオールバックにして縁のない眼鏡をかけた男性がカウンターの向こうから出てきた。

「久しぶりです、予終さん」

この人、あわいよつ淡予終いというこの店のバーテンダー的なことをしている人だ。

「そのこの娘のことは聞いたよ、法規君の妹ちゃんなんだって？僕は淡予終、この店のバーテンダーをしてるんだ。よろしくね？」

「は、ハイ！」

「フフ、まあたのみたいものたのみなよ」

「え、でもここって……」

「大丈夫、予終さんはお酒だけじゃなくて、料理もめちゃくちゃうまいから」

そう言って立てかけてあったメニュー表の一枚を手にとって優奈ちゃんに渡した。

優奈ちゃんはそれを受け取り、開いて中に書いてあったメニューを見ると、目を見開いた。

「え！？ホントにここってバーなんですか？」

「普通はそういう反応するよね」

そのメニュー表に書かれていたのは、そこら辺にあるファミレスのメニューの様なオムライスやドリア、流石にハンバーグ等はないが麺類なども揃っていた。

「凄い」

「兎に角何か飲みものでもたのもうか、歩き疲れたでしょ」

「ハイ、えっとじゃあアイステイーを一つと……真心さんは？」

「俺もアイステイーでいいです」

「畏まりー」

客に対する敬意がないのも相変わらずですね。

と。俺達が注文を終えた瞬間、曲識さんはまるで鍵盤を破壊するような勢いで指を叩きつけた。

乱暴に叩きつけただけの様に見えたが、ピアノからは調和の取れた音が流れ、そのまま曲識さんの流れるような指の動きとともにピアノから滑らかな音が流れだした。

「綺麗……………」

曲識さん大会とか興味ないからでないけど出たら確実に世界狙えるからな、ピアノは勿論声も他の楽器についてもスペシャリストだ。

なんで大会に出ないかというと、実はこの曲識さん、ピアノとかその他諸々の楽器でのオリジナルのCD等を匿名で出しており全国に凄まじい数のファンがいる。この店もそのCDで稼いだ金で建てられている。

「ハイお待たせ」

そう言い置かれたアイステイーを一口飲む、相変わらず美味しい。

「美味しい！これ市販のものじゃないんですか？」

「僕が色々とブレンドしてるんだー、味見は殆ど真心に任せてるから真心の好みの味になってるけどね」

「そういうこと、まあ好みが合つてて良かったよ」

「えへへ、真心さんと好みが同じ……」

ん？どうしたんだ優奈ちゃん。顔の表情がなんか崩れてるぞ、フニヤフニヤになってるといのか……。

「んじゃ追加でチーズケーキを
いる？」

優奈ちゃんも

「………へ？はい欲しいです！」

「それじゃチーズケーキを二つお願いします」

「ソースはどうする？無しにするかい？」

「優奈ちゃんはどうがいいかな、ストロベリーとブルーベリーとかもあるけど」

「私はストロベリーで」

「俺もそれでいいかな」

「分かったよ」

あれから三十分程、曲識さんの曲を聴きながら食事をした。曲識さんは基本的に自分のオリジナルの曲しか弾かないけどその全てが聞き入ってしまうほど美しかった。

「ホントに良かったんですか？やっぱり私も半分払った方が・・・」

「

「気にしないでいいよ」

曲識さんの店でちょっとした食事を済ませた後は会計（もちろん全額俺が払った）を済ませて店を出で、今は優奈ちゃんを家に送るところだ。

「此処でいいです、もう家まですぐですしね」

「そうか？ならいいけど、んじゃまたね優奈ちゃん」

「ハイ！あ、また一緒にお買い物・・・行ってくれますか？」

「ああ、いつでも」

「ッ！ありがとうございます！」

優奈ちゃんとはそこで別れた。

「ふう・・・帰るか」

明日は朝からバイトだし少し早目に寝よう。

俺のバイト先、その名は……

土曜の朝、
8:45。

今日は、というより土日は基本的に毎日バイトだ。行っている場所はファミリーストラン。元々俺は前世を含めてバイトをした事になかったし就職した会社も接客業とかとは縁がなかったし人前に立つのだってプレゼンの時くらいだったからここでのバイトは色々と刺激的だ。因みにバイト仲間も中々刺激的な人が多い。

「おはようございます」

バイト先に来てまずあったのはフロアチーフの轟さんだった。

「あら、想影君おはよう」

轟八千代さん。金髪ロングの細めの女性で確か二十歳だった気がする。機械音痴で世間知らずで天然、おまけに帯刀というファミレスのフロアチーフとして地味に問題がある様な気がするが問題なくこなしている。店長にメロメロ。

と。曲がり角から白藤杏子さんが出てきた。朝からなのに関わらず片手にパフエを持っている目付きが悪い雇われ店長だ。因みに元ヤンだったりして昔轟さんをイジメていたイジメっ子を以下略してその時から轟さんにベタ惚れされ世話をしてもらってる、店長という役職についているがその実質はニートと変わらないという人だ。店長の仕事もしていないしね。

……と
いうか！ここまでくれば

大概分かるだろう。ここ、あのworkingという漫画の舞台のファミレスだ。登場人物と同じ性格と名前の人もいる。確かワグナリアって北海道にあった気がするんだけど。もう突っ込むのも疲れたしなんか慣れた。

そう考えていると店の入り口の自動ドアが開いてお客様が入ってきた。

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

「三人です」

「はい、禁煙席と喫煙席どちらにいたしますか？」

「あー・・・じゃあ喫煙席で」

「畏まりました、こちらです」

「ふう・・・・・・・・」

もう二ヶ月になるけどやっぱり接客って緊張するな。向いてないってわけじゃないと思うし別に苦手ってわけじゃないんだけどどうも毎回毎回緊張しちゃうんだよな。

「それって普通じゃないですか？」

「そう思う？ いやでもね、二ヶ月もやってるんだからもう少し普通の対応くらいできないようにならなきゃさ」

俺の悩み？の相談に乗ってくれたのはworking本編主人公と小鳥遊宗太君、俺より一つ年下なんだが姉三人妹一人いながらその人達全員の掃除洗濯料理等々の家事をこなしつつ尚且つバイトをしながら成績を下げないという俺からすれば既に神業的はことをしている、この現世前世含め数少ない本当に信用できる人物の一人だ。原作を知っている俺からすればこんな人物が本当に存在して知り合いなんてのは既に偉人に会っている気分だったりする

「でも俺も偉そうな年上の接客の時は陰鬱だったり雑な対応しちやいますよ。はあ、今日先輩いないからちっちゃいものが」

この病的なほどのちっちゃい物好きがなければ。

「オイお前らハンバーグ定食とフライドポテト出来たぞ」

キッチン担当の佐藤さん。その佐藤さんの後ろで大きめの鍋を持っているのは佐藤さんと同じくキッチン担当の相馬さんだ。佐藤さんは目付きが悪く少し無愛想だがそれ以外は普通に気配りのきくお兄さんの人で、相馬さんは何故かバイト以外での俺達の行動や家族構成を把握している影の最強？だ。

「佐藤君、ちょっと僕カレーの仕込みやらなくちゃならないから、もう少しで上がる天ぷらの方お願いね。想影君と小鳥遊君ももうすぐ混んでくる時間だからね」

「あー了解。お前らもさっさとホール出ろよ」

「分かりました」「はい」

そう言つてホールに出ようとした時、丁度曲がり角から一人の女性が戻つてきた。

「げ、伊波さん!？」

「きゃあああ!？た小鳥遊君と想影さん」

ホールから戻つてきたのはオレンジ色の髪をした女性の伊波さん。男性恐怖症で男または雄が半径約二三メートルに入ると問答無用で殴つてしまう癖がある人。しかも地味に腕力が強い。小鳥遊君が世話係として任命されており日に何回か殴られていた。何故か俺はさん付で露骨に怯えられている。男性恐怖症でもここまで怯えられているのは俺だけだ。

「伊波さん、なんで想影さんだけそんな怯えてるんですか。いつもあの距離なら確実に殴ってくるのに」

それも困るけどな。俺は元より小鳥遊君もかなり丈夫だから大きな怪我は滅多にしないからいいけど普通の人ならあの威力だったら骨折とかするんじゃないか?ごく稀に相馬さんとか顔面に喰らつてるけど。

「お、想影さんはなんでか知らないけど身体が殴ろうと精神が拒否するっていうか………なんか分からないけど………
………本能?」

「本能で………それ俺が雄の犬とか子供とか殴つたりしないんで

すかつて聞いた時もそう言っていましたよね！？伊波さんは獣か何かなんですか？」

「ち、違っもん！人間だもん！」

「だったら一々人を殴るならまだしも怯えないでください。失礼ですよ！」

「いやいや小鳥遊君殴るのもどうかと思うぞ？君もだんだんここに染められてきたな。俺もだけど。」

「うっう……気を付ける」

「まあいいです。とりあえず離れてください。俺達十四卓さんにハンバーグ定食とフライドポテト出さなくちゃいけないんで」

「そうなんだ。分かった」

そう言つて退く伊波さんの横を通つてホールに出る小鳥遊君とそれを恋する乙女見たいな目で見える伊波さん。実際そうんだけどね。

「伊波さん」

「は、はい……何？」

「ああいや、別に俺は気にしてないから伊波さんも気にしないでいいからね。男性恐怖症が無くなつたら多分それも治るだろうし」

「う、うんありがとう」

「それじゃ」

「あ、想影君！ちよつといいかな」

「別にいいけどどうしたの？」

ホールから戻った俺を呼びとめたは種島ぼらさん。腰まであるぶつといポニーテールに同い年なのに俺の胸辺りしかない背丈という女性。

種島さんは俺を誰もいない休憩室まで連れ込んで扉を閉めた。

「あのね、伊波ちゃんと小鳥遊君の事なんだけど……」

「ああ、二人の仲の話？見守るしかないんじゃないかな、無理してくつつけようとしても小鳥遊君が無駄に怪我するしな」

「そうなんだよね、せめて伊波ちゃんがもう少し殴らない様になれば。でもでも伊波ちゃんも頑張ってるし……」

その分俺ら、主に小鳥遊君が血を流してるけどね。

まあ要するに伊波さんが小鳥遊君にに惚れているんだが小鳥遊君がそれに全く気がつかない上にちっちゃいものにしか興味がなく、伊波さんも伊波さんで男が近づくと殴っちゃうから全く進展しないという事でまわり（主に種島さんや相馬さん等）がやきもきしてるということだ。

「どっちにしろまずせめて小鳥遊君だけでも殴らなくならきゃな。そうすれば少しは……可能性は無きにしも非ずなんじゃ……」

「・・・？」

「それって可能性低いってことだよな！？」

「さあ？」

と。それからしばらくぎゃーぎゃーと口論をしていると休憩室のドアが開き中に黒髪の女の子、山田が入ってきた。

「あれ！？この時間まだ誰も休憩時間じゃない筈じゃ！？」

「山田、お前まだ休憩時間じゃないだろ」

「そうなの葵ちゃん？」

「え、えーとそれは・・・」

「山田ーーーー！！！！」

「た、小鳥遊さん！？」

今度は小鳥遊君が飛び込んできた。しかも肩を怒らせて手には段ボールを持っている。

「どうしたんだ小鳥遊君？」

「あれ先輩に想影さん。いやこれ・・・」

「ちよっ！小鳥遊さん駄目です！」

両手を広げて俺達と小鳥遊さんの間に入った山田の襟を摘み上げてその段ボールの中を見ると、そこには大量の割れたり欠けたりしている食器類がギッシリと入っていた。これは……………

「山田、お前破損届けに名前……………書いてある筈ないよな!？」

そのまま摘み上げている山田を出来る限り持ち上げて揺り動かした。これ弱い人だと吐いたりするが山田にはもう何回もやっているせいで加減が分かり吐けない様に絶妙な力加減ができる様になった。

「うえ……………ちょ、想影さん止めアップ!」

「きゃー!ー!想影君ストップ、葵ちゃん吐いちゃう!」

「大丈夫、吐けないギリギリを保ってるから」

「いいですよ想影さんもつとやってやってください!」

「あぶぶぶぶ……………」

「葵ちゃー!ーん!」

十分後……………。

「うゝまだ視界が揺れてます」

「自業自得だ、山田！さつさと破損届けに名前書いて来い！」

「そうだぞ山田、俺だって鬼じゃない。さつさと名前を書いてくればさっきのだけで罰は許してやろう」

「ハイ！書いてきます」

脱兎の如く走り去る山田を見届け、俺と小鳥遊君は溜息を吐き、種島さんは苦笑いをした。

「アイツの不真面目さ加減は筋金入りだな」

「もう山田の事はいいです。そろそろ混んでくる時間なので二人の事を呼びに来たんです」

もうそんな時間か。しみじみ思うけどなんでこんなデンジャラスなファミレスに常連さんがいるんだろうか、あと地味に客数は土日多いし。

「想影さん！行きますよ！！」

「ああ、了解！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3607t/>

真剣で最終に恋してみろ！

2011年10月23日18時28分発行